

幻の「ロボット技術展」(後編)

宮原 豊 (9組)

【膨れ上がる予算手当はどうするの?】

官民関係機関(外務省、通産省、日英協会、ジェットロ、産業ロボット工業会)トップで構成する実行委員会で、会場は Science Museum とする、開会式はジャパン・フェスティバルのメインイベントと同時開催とする、実演を可能な限り長期に実施する、展示・実演内容は科学博物館に相応しい子供たちの喜ぶようなものにする等々の基本合意がなされた。委員会の合意事項の中で直前までもめた最大の懸案は、両国の皇太子殿下がジャパン・フェスティバル開会式(外務省主催)から Science Museum での開会式に移動いただけるのか、来ていただけないなら中止するぞと言えるわけではないが、バッキンガム宮殿と宮内庁に直接の接点のない通産省勢は分が悪い。そもそも本件を持ち込んできた外務省さえ「最大限努力します」と霞が関的発言しかできない。



「ロボット技術展」は通常見本市会場で開催される産業見本市とは全く違う性格のものとなった。会場が博物館であったので、床の強度が産業ロボットの重量に耐えられるのか、英国の不安定な電力(電圧と電流)でロボットが安定的に制御できるのか、もしロボットが暴走した場合に観客を守る防御壁はどうするか等々の難題が持ち上がる度に予算が跳ね上がる。しかし、Science Museum は問題提起をするものの解決しようという意志はないように見える。音楽ロボット演奏を期待していたのに、産業ロボットに変更したのは日本側ではないかと考えていたのかもしれない。技術面で解決する目途は立っても、最後は膨れ上がった経費負担のことになる(金次第か)。

最後にロンドンに出張し、Science Museum の面々と日英双方の責任分担と費用負担をエイヤツ、エイヤツと仕切って、帰国後に“剛腕を発揮して”、あるいは“手品師のように”予算手当をした。やりくり算段は会計担当、展示担当と部長、課長しか分からない。後に

各方面から予算総額はいくらだったか、原資は何かと質問されるが、ロボット展のために新たに製造されたロボットの製作費や技術者の長期派遣費など十数社の参加企業が負担した費用を含めるとざっと 100 億円は下らない。ジェトロは機械部の海外展示等の事業予算の 3 年分をここに注ぎ込んだ。予算案は役員会を経て組織的に了解され、事業終了後の収支報告に大きな欠損はなく帳尻は合っている。詳細はもはや説明できないが、関係の方々には大変お世話になった。



記念の記帳をされる両国皇太子殿下

【幻の大事業となった訳】

もはやお金のことは喋らない方がよいかもしれないが、辛い話することが出来ない。記憶も記録もないからだ。平成元年～3 年頃は記録は全て紙媒体で分厚いフォルダーに収められた。公開されて困るような「秘密ファイル」ではないのに、数年後に資料は全て「消滅」されたと言う。隠蔽ではない。

(もう時効だから言うが) 3 代後輩の「総括」が事務所の内装工事の時に、間違っ

てを廃棄処分(溶解)したという。罰当たりなのは、両国の皇太子殿下の写真も両殿下が記念に記帳されたアルバムも何もかもだ。その上に、「ジェトロ創立 40 周年記念誌(1998 年)」を編集した時に本件を携わった主要メンバーは海外勤務や地方勤務だったために記念誌のことを誰も知らなかった。そのためにこの記念誌には 1 行も載っていない。開会式に両国皇太子殿下が臨席され、1 ヶ月半も実施された大イベントにも拘わらず、知る人ぞ知る(ほとんど誰も知らない)「幻の大事業」となってしまった。私が保管しているこの報告書(小冊子)が「ロボット技術展」を証明する唯一残された資料である。私にとってかけがえのない「お宝」なのである。(了)



(2019 年 5 月 8 日記)